

ボローニャ、タナーリ家のアレクサンドロス大王伝

—カラッチ一族の「インヴェンツィオーネ」再考に向けた一考察—

山本樹(日本学術振興会特別研究員 PD/成城大学)

本発表は17世紀ボローニャ派の大家、ルドヴィコ・カラッチによる3枚の絵画、すなわち《アレクサンドロス大王の誕生》、《アレクサンドロスとタイス》、そして近年東京の国立西洋美術館で再発見された《ダリウスの家族》を考察対象とする。これら作品群はボローニャで元老院議員を務めたタナーリ家の美術コレクションの一部として17世紀中葉より記録されてきた。同コレクションは19世紀の旧体制解体期に散逸したが、現存していればボローニャにおける最大級の美術コレクションの一つであったことは疑いない。

考察の糸口として、タナーリ家の居室の暖炉上に設置されていた《アレクサンドロス大王の誕生》をまずは取り上げる。本作は所在不明だが、最終段階に極めて近い状態を示す準備素描から全体の構図を窺い知ることが可能である。アレクサンドロス大王誕生の日にアルテミス神殿が炎上したという伝説を忠実に描き出したかにみえる画面の中央部分に対して、右端に描きこまれた雄羊の頭部を持つ人物と、その下に横たわる爬虫類様の生物の存在は不可解である。本作を政治的文脈から捉えたクリスティアンセン(2003)は、これをタナーリ家の庇護者であったローマのボルゲーゼ家の紋章の一部と見なした。しかしプルタルコスの大王伝を確認すると、この羊頭の人間が大王の伝説上の父親、ゼウス(ユピテル)・アンモンであることが理解される。ギリシャ神話のゼウスは大王の東方遠征の過程でエジプトの伝承と融合し、ゼウス・アンモンという羊頭の神像として新たに造形された。横たわる生物は、大王の母オリュンピアスが交わったとされる密儀の蛇と見なせよう。ゆえにこの絵が物語るのは、アレクサンドロス大王が蛇ではなく諸神の王ゼウスから生まれたこと、ひいてはタナーリ家当主アレクサンドロの血筋の正統性だと考えられる。

本作を含む一連の大王伝は、1610年代から本格化する、タナーリ家の元老院議席獲得のための教皇庁に対するロビー活動の一環として、同時期に着工された同家新館のために描かれたと考えられてきた。しかし作中に必ずしもそうした政治的含意が読み取られないとすれば、制作背景についても再考の余地がある。様式を観察してみると、例えば《ダリウスの家族》と《アレクサンドロスとタイス》はタナーリ家旧館時代の年代に位置付けられ、かつ両者の間には10年ほどの開きがあると見られる。つまり本作品群は教皇庁に向けたアピールというよりも、むしろ当主と同名の英雄伝として、旧館時代から徐々に描き継がれていったと考えるのが自然である。

異教神話の英雄譚の表象によって一族の高貴な血統や人格を強調することは、同時代のボローニャの都市エリートの邸宅装飾でしばしば試みられた。本発表では同様のコンセプトを持つ作品群の中にタナーリ家の大王伝を位置付けると共に、カラッチの「インヴェンツィオーネ(創意)」についても再考を試みたい。